



柴田勝家

第一話 「虎よ、虎よ、もひとつ虎よ」

私が白年堂はくねんどうに入った時、ちょうど奥の方から植草貞夫うえくささだおアナウンサーの「ぎゃくてーん」の音が響いてきた。昭和六十年のプロ野球阪神巨人戦で、阪神のバース、掛布かけふ、岡田おかだの三者が連続でバックスクリーンへホームランを放った伝説の試合の時の実況だ。

「つくもちゃん、奥ですかー」

そう一声かけてから、私は雑然と物が積まれた店内を縦になり横になりながら抜け出して、勘定台の向こうの座敷部分へと辿り着いた。折しも、奥からは四番掛布への声援が轟いている。

「つくもちゃん、また見てるんですか」

「これは見飽きないから」

座敷に設えられたブラウン管のテレビの真ん前に、ちよこんと正座し、膝に飼い三毛猫のナベシマを置いた女の子が居る。彼女は、確か今年で十五になるはずだったけれど、私から見ればまだ小学生のようなものだ。

というか背丈が低いせいかな、周囲の誰からも小学生に見えてしまうと思うけど。

そんな風に思っていると、植草アナが掛布のホームランを伝える。このシーンは私も覚えてしまった。クロマティは追わない！

「楽しい？」

「楽しい」

年代物のブラウン管テレビに、最新型のブルーレイプレーヤーを接続。父親が録画していた昭和の名勝負の数々を、隅から隅までブルーレイにダビングし鑑賞。

ああ、真冬にコタツでアイスを食らうが如き、最上の贅沢。

という名の無駄遣い。

「つくもちゃん、早く地デジ化しましょうよ」

「イヤ」

「なんで」

「まだこのテレビ使えるから」



虎張り子(大阪府・大阪市)

「でもテレビ番組の方が見れなくなりますよ」

「そしたらずっとビデオ見てる」

なんという、この少女は国策に真っ向から勝負を挑むつもりなんだ！

「あの変なシカのぬいぐるみくれたら考える」

折れた！ 弱いな、こいつ！

「岡田ー、かっとばせー」と、つくもちゃん。

「結末知ってるでしょうに」と、私のツツコミ。

案の定というか予定調和というか、変えられない過去の出来事というか、岡田もバックスクリーンへと白球を運んだ。

これにて伝説のバックスクリーン三連発達成。テレビ画面の向こう、投手の榎原まきはらが茫然自失という感じだ。

「つくもちゃん、この試合何回見てるんですか？」

「もう十回以上は」

ということとは、榎原投手は実に三十発以上もホームランを打たれているのだ。酷なことをしてくれる。

制服のスカートの上で寝ていたナベシマが一鳴き。

「つくもちゃんは、本当に古いものが好きですね」

「そうでなきや、古道具屋なんてやってない」

そう言って、私の従妹であり白年堂の主人である百瀬ももせつくもは、今日ここに来て、初めて笑ってくれた。

※
につぼり

日暮里駅を降りると、いくつもの寺院に囲まれた、下町情緒やねせんというものを遺憾なく発揮している地域がある。谷根千とか、そんな小洒落た言い方で、テレビ東京なんかの街特集系番組でフューチャーされてしまうような所だ。

そんな街の片隅に白年堂はある。

この小さな古道具屋に、私がちよくちよく行くようになったのは、中学三年生の頃だったと思う。その頃は、私の叔母さんの義理のお父さん、という、それほど赤くない他人の、百瀬春道はるみちというお爺ちゃんが白年堂の店主だった。

この人は頑固なお爺さんだったけれど、私にとっては興味深い人であった。私の好奇心を満たしてくれるくらい、色んなことを知っている凄いい人だったのだ。

と、箆たんすの上たんすに飾られた春道さんの写真を見る。

春道さん、貴方の白年堂は今も無事に営業していますよ。

「惜しい人を亡くしたよね、本当」

と、ナベシマを撫でつつ呟く、つくもちゃん。

「死んでないよ！ 隠居しただけだよ！」

この孫はさらつと祖父を亡き者にしたよ！

しかし、そうなのだ。あの春道さんが、後を任せるに足ると判断して、この百瀬つくもに店を任せた。それだけ、この少女は物というモノを愛している。

そうとも。つくもちゃんは、人よりも物の方が大事と
張るくらいの人なのだ。

昔、彼女と一緒に土手をサイクリングした時、私が余所見
をしていて転げてしまった所、即座に「大丈夫!？」と駆けつ
けてくれた。自転車の方に。

そんなつくもちゃん。目利きとか、そういうことは私には
解らないけど、彼女の物に対する知識の豊富さと愛情は祖父
譲りだ。とにかくも、この子は物を愛して止まない。ある種、
病んではいるけど。

そして、とってもクールな女の子だ。泣いた所を見たこと
が無い。人生で泣いたのは、大事にしていた人形が壊れた時
だけだと豪語する。そこまで言うからには、赤ん坊時代も無
言だったのだろう。

「兎仁子お姉ちゃん、夕飯食べてく? 缶詰みたいのしかな
いけど、魚と肉どっちが良い?」

「え、そうですね、じゃお魚で」

「ナベシマ、じゃ、お前は肉ね」

「え! ネコ缶食べさせるつもり!？」

そして、時折こうして私のことをイジめます。

イジメいくくないよ!

「冗談だよ、ちゃんと作ってあげるから」

つくもちゃんが笑う。

この笑顔を見ると、ある程度のことには許せてしまう気がす
る。だって、普段笑わない彼女が、私にだけこういう顔を見
せてくれているのだ、って、そんな優越感。

「ナベシマの方もちゃんと作ってあげるよ」

と、ネコに向かつて満面の笑み。

小さな優越感も爆散だよ!

と、その時だ。建て付けの悪いガラス戸を引いて誰かが入
ってくる音がした。お客さんが来たのだと思って、私はつく
もちゃんよりも先に、店先の方へと歩き出す。

しかし、どうにも柄の悪い客だなあ。

元より、あっちこっちに好きなように古道具を積んだ魔宮
なのだ。人の移動に適した造りにはなっていない。だけれど、
周囲に積み重なった古道具達に、ゴンゴンと体をぶつけなが
ら進み行く客が居るものだろうか。

そんなこんなで、一際大きなゴツという音。

「いったいわねえ!」

私が勘定台に戻った時、ビジネススーツに身を包んだOL
風の女性が頭を押さえて屈んでいた。どうやら天井から吊り
下げられている銅の吊り灯籠に、頭を思い切りぶつけたよう
だった。

「あの、大丈夫ですか?」

「あ、ええ。大丈夫、よくあるのよ」

そう言うと、女性は何事も無かったかのように背を伸ばすが、大きい。

予想を遥かに超える女性の背丈。私を遥か見下ろす高さ。百七十台の後半はあるだろうか。

モデルのような高身長と、キリっとしたスーツ姿に、私は思わずたじろぐ。こんな人がこんな店になんの用だろう。

「あの、ねえ、ここ骨董屋よね」

「え、あ、はあ」

骨董屋なんて上等な名前前で呼んでいいのかな。周囲一面に転がっているのは、誰も使わないから仕方なく積んであるような、用途不明な物品の数々だ。

「じゃあ、買い取って欲しい物があるんだけど」

そう言って女性は、持っていたハンドバッグをがさごそと探り始め、やがて一つの小さな物を乱暴に取り出すと、またも乱暴に勘定台の上に置いた。

それはなんだか小さくて、黄色と黒のしましまで、子供の玩具みたいだけど、なんだか立派な感じで。

あ、これ虎だ。

私は横になっていたそれを取り上げ、ちゃんと四本足で立たせてあげると、それは嬉しそうに首をゆらゆらと上下に振った。真ん丸な目に半開きの口が、ユーモラスを通り越して、間抜けにすら見える。でも私は大好きだ。

というか、昔どこかでこんなのを見たことがある。確か、会津かその辺のお土産で、首を振る牛の人形で、えっと。

「赤べこ？」

「違うよ、虎張り子」

私の発見を、後ろからゆったりやってきたつくもちゃんが否定する。でも虎張り子ってなんだろう。

「女の子しかいないの？ 店主は？」

「私です」

つくもちゃんの声のトーンは、いつも一定だけれども、こういう状況だと、えもいわれぬ貫禄をかもし出している。

「そう、まあなんだって良いけど、それで、これ買い取ってくれる？」

「申し訳ないのですが、ウチは古物免許が無いので買取はお断りしているんです。無償取りのみ、受け付けております」

「え、免許無かったの？」

うん、とごく平然と頷くつくもちゃん。

無償取りのみでやってきたから、いつの間にか白年堂はガラクタの山になってしまったのか。いや、元の元々、ガラクタかどうかとも私には解らないんだけど。なんだかちよつとシヨック。

「なんだって良いわよ。とにかく、こんな物、私は二度と見たくないの、無償でもなんだって良いから引き取って頂戴」

未だに台の上で所在無きげに首を振っている虎を一瞥して、女性は吐き捨てるように言った。

「そういうことでしたら、引き取らせて頂きますが」

そういうつくもちゃんの声は、どこか含みがある。

クールでいつも通りな彼女の様子。それは傍目には解らないだろうが、私にはつくもちゃんが怒っているのが解った。

彼女は、女性が虎を指して「こんな物」と言ったのが気に食わないのだ。いっだって、物に対して冷たくあたる人に、彼女は冷たいのだから。

「じゃ、後は好きにしちゃって」

スーツの女性はそうして、もはや何も見ずに振り返って歩き始めていた。

ゴッ。

「いったいわねえ！」

再び吊り灯籠にぶつかった頭を押さえながら、ついに嵐のように現れた女性は、嵐のように去っていった。

後に残された虎張り子が、飼い主に捨てられた犬のように、何度も何度も首を振っている。その姿が、堪らなく可哀相に思えた。

「今の人、凄かったですね」

「私、ああいう人嫌いだけどね」

「あけすけですね、つくもちゃんは」

私は虎張り子の頭をちよんと突く。口をあんぐり開けたまま、虎は何度も頷いている。その通り、その通り。

「つくもちゃん、この虎、私にくれませんか？」

「気に入ったの？」

「はい、とつても可愛いですし」

「じゃ、二千元ね」

「お金取るんですか!？」

「商売だから」

免許無いのに！ あこぎな商売だよ、全く！

「まあ、売るのはもうちょっと無しで。なんかね、今は売っちゃいけない気がするから」

「また、変な気がする、ですか？」

「このコがき、訴えてるんだよ。本当に居るべき場所はここじゃない、って」

つくもちゃんが、虎の頭をちよんと、と。

「器物百年を経てなんとやら」

「百年経った道具は妖怪になるんですよ」

「うん、知ってる。付喪神つくもがみってやつ。でも、百年も経たないと人に物事を訴えられないなんて、不器用なものだね。物つてのはさ」

そしてナベシマが、虎の張り子に似た顔の大あくび。

※

その翌日、小人が来たそうなの。

いやいや、それは言葉の綾です。実際に来たのは、増長天ぞうちょうてんの仏像みたいな顔をしたサラリーマン風の男性らしい。その身長が百五十台そこそこだったのと、先の女性との対比から小人と表現したのだそう。

そうしてミニ増長天さんは、白年堂に入ってくるなり、

「昨日、ここに女性が張り子の虎を売りに来ませんでしたか」と言ったとのこと。

さては昨日の女性と因縁浅からぬ人だろう、と、耳年増である所のつくもちゃん**は必死に推理したそうなの。**

ふふん、中学生の時分から男女の仲を推理するとは、なかなかにおませさんな——

痛い痛い痛い！ 地の文を独白している最中に、背中をつねらないでください、つくもちゃん！

「それで、その男性は言いました。あの虎は大事なモノだから、できれば返して欲しい、と」

座敷で茶を啜りながら、つくもちゃんが乱入してきた。私の説明では御不満タラタラなのだろう。

「だから私は言いました。本人でない限り、一度引き取った物を渡す訳にはいかない、と」

「それで、どうなったの？」

独白&回想終了。もういつものお喋りでいいや。

「男の人が言ってたよ。自分は昨日の女性の夫だ、って」

「でも返さなかった」

そうやって、私は未だに勘定台の上で首を振る虎張り子をつつく。お客さんを迎えるマスコットキャラになれるだろうか。お客さん滅多に来ないけど。

「色々話を聞いたら、あの女の人に取りに来させた方が良く思ったから」

今度はつくもちゃんが、虎張り子の頭をつつく。

「この虎張り子、男の人の田舎の母親、つまりあの女の人の姑さんから送られてきたモノらしい」

「あらら、嫁姑戦争でしょうか」

「さあ、阪神巨人戦みたいなモノだと思う」

なるほど、まるきり解らない。

「なんでも、あのご夫妻、共働きらしいんだけど、最近になって小さなお子さんが風邪をこじらせて入院しちゃったそうなの。その責任の擦り付け合いで、さんざっぱら夫婦喧嘩してたらしい」

「ふむふむ。それは子供の方が可哀相です」

「そんな時、話を聞いた姑さんが孫の為に、って一筆添えて、例の虎張り子を送ってきた」

「すると、どうなりました」

思わずそんなことを言う。なんだか、後楽園ホールで落語家にネタを振る司会者になった気分。

「いつも何もしないクセに、こんな時に玩具を送ってくるなんてー、と奥さんが逆上乱逆つらつっつ」

「はあ、やつぱり嫁姑戦争ですな」

「だから阪神巨人戦だってば」

つくもちゃんが頬を膨らませる。可愛いなあ、もう。

「本当は喧嘩するような話じゃないんだよ。でも阪神と巨人は解り合えない間柄。だからこそ、意味の無い対立が生まれちゃうんだよ」

そう言って、つくもちゃんは虎張り子をジッと見つめている。こうして何かしらの物を見つめる時の彼女は、その奥にあるもつと深いモノを見ている気がする。

「それで、結局その女の人が怒ったまま、この虎張り子を売り飛ばしに、というか捨てにやってきました、というお話」

「ははあ。解ってきましたよ。それで旦那さんの方は、母親からの贈り物を無下にされたことに怒りつつ、取り戻しに来たと」

「どうかな。旦那さんの方は、少しはこの虎張り子の意味が解ってると思うんだけど」

「虎張り子の、意味？」

ちんぷんかんぷん

珍紛漢紛ですよ、つくもちゃん！

「何はともあれ、もう少ししたら虎張り子を引き取る為に、旦那さんが奥さん連れてこの店に来ることになってるから。そこで少しばかりお説教」

「物を大切にね」

「そゆこと」

そんなこんなで、私はナベシマと遊びつつ、つくもちゃんはブルーレイで昭和六十年の大相撲夏場所、小錦対千代の富士ふじの取組を見始めてしまつて、二人して件の夫婦がやって来るのを待つてみる。

するとやがて、がたぴし戸が開く音がした後、何やら不穏な空気と共に一組の男女が白年堂へと入ってきた。

男性の方はスッスツと、迷宮じみた店内を忍者のように颯爽と歩いて、女性の方は周囲から張り出した古道具を、服にひっかけるのもお構いなしにドスドスと猛進してくる。

ははあ、なるほど。これじゃ巨人と小人だ。

先日と同様に、頭上を気にかけてつつ女性が勘定台の前へ立ち、増長天さんの方がその横に並ぶ。身長差はざつと三十七センチ近くはあるうか。女性の方はより大きく見えるし、男性の方はより小さく見える。対照が見事な夫婦っぷりだ。

「さあ、妻を連れて来たぞ。虎張り子を返して欲しい」

「何言ってるのよ！ 貴方が納得したいって言うからついてきたけど、そういうことなら帰るわよ」

「お前こそ、母さんがせっかく送って来たものを、よくも勝手に！」

「何よ、貴方だって最初は怒ってたでしょ！ もっとマシな物を送ってくれば良かったとか」

「そ、そんなの君に同調しただけだ！ 本心じゃない！」

あらら、つくもちゃん。お客さん来て早々喧嘩ですよー。

私は後方の座敷に救難信号。

つくもちゃん、小錦と千代の富士が、立会いの段階で中々勝負に入らないので、もう少し待てと合図。もう、小錦早く行けよ！

ちら、と夫妻の方。

「そうね、どうせ貴方はお義母さんから小遣いでも貰ってたんでしょ？ 私には何も無しで、病気で苦しんでるヨシヒロには、こんな下らない玩具送って超越して！」

「だが、そうは言ったって、何もこんな所に置いて捨てるような真似しなくても良いだろう！ せめてヨシヒロが退院したら、渡してあげるとかな……」

「貴方、いつも思ってたけど、お義母さんに対して少し甘いんじゃないの？ そんな風に甘やかすと、その内どんどんゴミを送りつけてくるわよ！」

「ゴミとはなんだ、ゴミとは！」

つくもちゃん、白年堂と虎さんの評判がボロクソですよ。

「こんな物があるから、下らないことで喧嘩するのよ！」

「これは僕のものだぞ！ 勝手にするな！」

と、ここで夫婦揃って勘定台の上の虎張り子に手を伸ばす。哀れな虎さんが泣きそうな目をしながら首を振って、自分の身の振り方に思いあぐねていると――

「ちよつと黙ってて」

ピシ、と叱りつける調子で声を上げたのは、昭和の名勝負を見終えたつくもちゃん。座敷の方から立ち上がって、喧嘩の止まない夫婦の方へと歩いてくる。

中学校の制服を着たままのつくもちゃん。紺のセーラーを引っさげて、ジャンパースカートをためかせ、しゃなりしゃなりと歩いてくる。その様子には、言葉にできない威厳がある。気がする。

「その虎張り子は、一度は私が引き取っていますので、今は私の物です。勝手に触れないで欲しいです」

つくもちゃんの言葉に、夫婦揃ってグツと息を呑んで、伸ばしていた手を引っ込める。

「貴方達は、二人揃って、その虎張り子の意味を解っていないようですな」

ちよん、と虎張り子に手を触れるつくもちゃん。

「物言わぬ物こそ、聞くべき声があるのですから」

凜、と場の空気が引き締まる。

たまにこういうつくもちゃんを見ることがあるが、そんな時はもう私は何も言えない。彼女は言うべきことを全部解ってるから、私はいったって話を聞くだけ。だから、この仲の悪いご夫婦も、こうなってはただつくもちゃんの話の聞かないのだ。

「さて、ええっと。まず失礼ながら、旦那さんの出身は大阪でしょうか？」

「え、いきなり何を」

と、増長天さんは当惑顔。それに対し、奥さんの方が「そうよ」と肯定してくれた。

「私は東京出身だから、何かと合わない所もあったの」

「そ、そんなの、今まで君は言ってくれなかったじゃないか」
 ははあ。こりや大阪と東京の代理戦争、よもや阪神巨人戦か、と思いたいけど、巨人と小人の戦いじゃあちよつと形が違うな。

「ところで、旦那さんは大虎おおとですか？」

突然、つくもちゃんがそんなことを言ったので、私も含めて三人が一斉に彼女の方を見る。

「は？ どういう……」

「いえ、お酒は飲むけどそこまでじゃ……」

夫婦がほぼ同時に口を開いた。妻の抗弁に対して、旦那さんの方は不思議そうに見つめている。

「奥さんには意味が通じたみたいですけど、旦那さんには解らないみたいですね」

「あ、いや、大虎って言葉の意味が、ちよつと」と、ちよつと恥ずかしそうな旦那さん。

「酒を飲んで悪酔いする人のことよ」

奥さんが視線を下にして、優しい調子で伝える。それを聞いて旦那さんは「なるほど」としかめ面のまま頷いた。

「それでは奥さんに聞きますけど、どうしてこの言葉の意味を知ってたんですか？」

「そうね、社の飲み会かなんかで、年配の上司が口にしたのを覚えてたんだと思う」

「そうですね。奥さんには、そういう背景があつて言葉の意味が解っていた。一方、旦那さんは単純に言葉を知らなかつた。そんな時、もし奥さんが悪酔いした旦那さんに対して、アナタは大虎ね、なんて言葉を使ったとしたら、旦那さんはどう思うでしょう」

「なんとも思わないんじゃないかしら」

「でも、貴方は意味を込めようとした」

ぴしやり、とつくもちゃんが言い切った。

「意味が伝わらない、それは言葉にしる物にしる同じです。それは自分と相手の持つ背景が異なっているから。竹林の中の虎か、檻の中の虎かで、見る方の意識も変わってくる」

つくもちゃんは左手の五本の指を使って、虎張り子の前を塞ぐ。私はそれが茂みの中に隠れた虎に見えた。

「き、君は何を言いたいんだ？ ただの古道具屋が、こんなことをペラペラと喋る必要があるのか？」

「あります、と静かな調子のつくもちゃん。」

「私はただの古道具屋です。古い物を買って貰う。でも物には物の意味がある。背景がある」

「ここでつくもちゃんが、首を振ってクールな流し目を困惑する二人に送る。」

「物の背景も意味も、全部含めて買って頂きたいのです」

その物言いに呑み込まれたのか、もはや二人の男女は場の成り行きを、この小さな女の子に委ねてしまった。

「物の意味、ってどういうこと？」

「簡単な話なんです。今回の一件、それは奥さんが物の意味、その背景を知らなかったから起こった、誤解による些細な喧嘩です」

誤解によるもの、と聞いて、ついに気丈だった女性の方も、いくらか怯んだような気がする。

「私はただの古道具屋として、背景を見れる立場に居るからこそ、屏風の虎を前にして悩んでいるお二人にお話したいと思います」

「そう言っ、つくもちゃんは例の虎張り子を手に乗せた。」

「木や竹で作った型に和紙を何重にも貼り付け、様々な造詣を行う、こうした張り子人形の産地は全国ですが、中でも福島県の三春張子や長野県の松本張子が古く、他は関西で作られた物が主流です。そしてそこから派生した江戸の亀戸張子は、亀戸天神の土産物として関東一円で広く普及しました」

淀みない彼女の説明に、虎の頭もゆらゆら。

「そして今でこそ、端午の節句なんかで飾られることもありませんが、本来、虎の張り子人形は郷土玩具です。虎張り子は香川県の高松張子や島根県の出雲張子も特産ですが、その流の発祥自体は関西、それも大阪にあります」

「大阪発祥なのか」

と旦那さん。どうも知らなかったらしい。

「旦那さんは大阪の、道修町あたりの出身でしょうか？」

「え、実家は九条ですが、確かに道修町ら辺には良く行ってきましたけど……。お前、そのこと話したのか？」

「別に、そんなことは伝えてないわよ」

魔術のように、旦那さんの出身地情報を引き出したつくもちゃんに対し、二人は狐につままれたような顔。

「道修町は医薬の町です。鎖国時代よりオランダや中国から、薬を輸入してきた歴史があり、今でも多くの製薬会社が存在していますし、日本最初の薬科大学を置いたのもこの町です」

「そういえば、母さんがそんな風なことを言ってたが」

「じゃあ、だからこそ、お母様は意味が通じると思ってた例の虎張り子を送って来たのでしよう」

「どういうことよ」

と、解らないことだらけの奥さんがいよいよ不機嫌に。増長天さんよりなお怖い、毘沙門様だ。

「お母様はお孫さんが病氣と知って、例の虎張り子を送って来た。道修町に近いのなら、もっと実用的な薬だつてあるでしょうが、だからといって、勝手に薬を送るなんていう素人判断はできない。だったらせめて、病氣が治ることを祈って、その虎張り子を送った。そう私は考えます」

「虎張り子が病氣を治るよう祈ったモノ？」

旦那さんの方も、さていよいよ訳が解らないという顔だ。

「虎張り子の起源というのは、道修町にある少彦名神社すくなひこなという神社で配られた物が最初であると言われています」

「少彦名神社？　そういえば昔は良く、道修町の神社でお祭りがあると、母さんはその辺りでお土産を買ってきてくれていたりしたが」

「恐らく、少彦名神社の神農祭しんのうさいだと思います。神農しんのうというのは、中国の神様で医薬の神様です。社名にもある少彦名というの、同じように日本神話における医薬の神様です」

「そうなんですよ。医薬の町に、医薬の神様を祀った神社があるんですよね」

しばらく黙っていた私は、ここぞとばかりに、解説するつくもちゃんに合わせる。実は私も、彼女が今説明してくれた話は、かつて春道さんから聞いていたので知っている。

「その神農祭では、今でもその虎張り子を配っています。その始まりには、江戸末期の文政の時代に関西で流行ったコレラが関係しているんです」

「コレラって、漢字だと虎列刺これらや虎狼痢ころりみたいに見えるんですよ。虎の字を使うんですね」

手近な台帳に得意げに漢字を書く私。つくもちゃんの目が、黙ってて、と訴えている。ごめんなさい。

「コレラの流行で、多くの人が苦しむ中、道修町の薬問屋の人達が集まり、トラの骨など貴重な材料から虎頭殺鬼雄黄圓ことうさつきうおうえんという特効薬を作りました。そして少彦名神社では、この薬を渡すのと共に、薬の名前にもある虎の張り子を作った。以来、この神社では虎張り子を疫病除けの御守りとしています」

「疫病除けの御守り、って、それじゃあお義母さんは……」

「そうでしょう。虎張り子はお孫さんへの玩具としてではなく、病氣で苦しむお孫さんの為の御守りとして送って来たんだと思います」

ここに来て、ようやく女性の方の顔が和らいだ。申し訳なさそうで、また泣き出しそうな顔でもあるのだが、もう今までの怒気は消え去っている。

「アナタ、ごめんなさい」

「え、あ、いや……」

素直に謝った奥さんに対して、旦那さんは面食らった風。増長天の顔も、眉が垂れ下がってどこか情けない。

「私、何も知らないで、お義母さんの心遣いに気付かなかつたのね」

「いや、僕の方こそごめん。本当なら僕が気付かなくちやいやけなかつたのに、そんなことすっかり忘れて……」

「私、カリカリしてたのね。もつとゆっくり、ヨシヒロのことを考えていれば良かった」

奥さんは長身を屈めて、虎張り子の頭に優しく触れた。それを見ている旦那さんの顔も、今はずっと優しくげだ。

「物に込められた意味、解って頂けたでしょうか」

つくもちゃんの問題に、巨人と小人の夫婦は一度だけ互いに目配せをした後、力強く頷いた。

これにて一件落着か。虎張り子の間抜けな顔も、どこことなく嬉しそう。

※

白年堂の奥の座敷で、何度目かの植草アナの声が響く。

「物の意味って大事なんですね」

「それこそ薬にも毒にもなるからね」

テレビを見ながら煎餅を頬張る私と、ナベシマの脇に手を入れて、ぐーっとその体を引き伸ばして遊んでいるつくもちゃん。えげつねえ。

「受験生にウソっていう鳥の彫刻を送って見たら、どう思うかな？」

「え、なんだろう。意味が解りません、ね」

「それが東京の亀戸天神とか湯島天神とか、各地の天満宮の学業御守りだつてことが、ちゃんと解ればいいんだけどね。

どうしても背景が違つと、意味が伝わらないんだよ」

いよいよ気味悪いくらい体が伸びだしたナベシマが、ナーっと抗議の声をあげたので、つくもちゃんは解放してあげることにした。

「ナベシマは、猛虎にはなれないねえ」

ぽつり、と呟いたつくもちゃん。

ブラウン管の向こうでは榎原投手が、新たに三本ほどホームランを打ち取られている。イジメいくくないよ！

「ねえ、つくもちゃん」

「なに？」

「少彦名神社の神様、私、知ってますよ。少彦名命すくなひこなのみことですね。日本神話では大国主命おおくにぬしのみことと一緒に頑張つて、日本を治めた神様です」

「そうだね」

「大国王が巨人で、少彦名が小人、っていう対比があるそうですね。ならあのご夫婦も、仲良く家庭を治めて貰いたいのですね」

ナベシマが縁側の方へ歩き出し、陽気に伸びをし始めた。あんなに伸ばされた後なのに。

「昔から、虎の夫婦は仲が良いとも言うよ。だから夫婦寅は縁起物として扱われてる」

私は、あの虎張り子を手に、仲良さげに店を出て行く二人の男女のことを思い出していた。

ブラウン管の中で阪神の岡田が、縁側ではナベシマが、夫婦の間を一つの玩具が。そうして三匹の虎が駆け巡っていた。

〈了〉